

“『老乞大』・『朴通事』の言語” 国際シンポジウム参加報告

遠 藤 光 暁

1. はじめに

表題の会議は中国語では「“《老乞大》、《朴通事》” 国際学术研讨会」といい、2010年6月12日・13日に中国社会科学院語言研究所と浙江大学漢語史研究中心の共催により中国浙江省杭州市桐廬にて開催された。

『老乞大』と『朴通事』というのは朝鮮において高麗時代（中国では元代に相当する、14世紀頃）から使われていた口語中国語教科書であり、日本では戦前から一貫して中国語史・朝鮮語史の重要資料として研究され続けてきた。

その基礎資料としては当初は京城帝国大学奎章閣叢書第9（1944年）『老乞大諺解』（1670年）および第8（1943年）『朴通事諺解』（1677年）が使われていたが、戦後に韓国でより古い16世紀初頭の崔世珍の諺解によるいわゆる『翻訳老乞大』上・下および『翻訳朴通事』上が発見され影印本も韓国で刊行された。更に時代の下る『老乞大新釈』（1761年）、『重刊老乞大』（1795年）、『朴通事新釈』（1765年）などは長らく影印本が出されておらず、かえって研究が遅れていた。そこに1998年になり韓国で『（旧本）老乞大』が発見され、2000年に韓国・中国で影印本が刊行されるに至って、俄に『老・朴』研究熱が沸騰することとなった。旧本においては、元代（1271年–1368年）の「漢兒言語」と呼ばれるアルタイ系言語の色彩を濃厚に帯びた口語中国語があらわに反映されており、文学作品や歴史書や刑吏の手になる修辭の加工を経た書き言葉からは間接的にしか分からない言語特徴がかなりストレートに出ているものと見られる。ただし、この「漢兒言語」の性質については議論の焦点となっており、今回の会合

でも繰り返し話題に上った。

外国人のための会話教科書という性質から、本国資料には現れにくい生き生きとした口語を反映しているという特徴のほか、『老乞大』はもう一つたぐい稀な特質を持っている。それは朝鮮時代になって訳官を養成するための入門教科書として数百年に渡って使用され続け、時代の変遷に応じて言語特徴が変わっていくたびに改訂が行われ、全く同じ内容について一字一句のレベルで逐一对応した4種類のテキストが得られる、という点である。即ち、旧本一翻訳¹⁾一新釈一重刊において、14世紀—15世紀末—18世紀中葉—18世紀末といった異なる時代の口語中国語の変容ぶりを同一内容について観察することができるのである。もちろん、基づいた方言的特色や文体的特色が必ずしも同一ではないので、その異同を直ちに一直線の歴史的変化と見立てることは慎重であらねばならないが、相当まとまった分量について同一文型・同一語の厳密な比較資料が与えられているのは、他の諸言語の資料を見渡しても聖書や仏典などの聖典の諸時代・諸言語の翻訳を除いてはまず考えられない好条件である。

朝鮮時代の諸版はそれに加えてハングルによる精密な注音と朝鮮語訳もついていて、中国語音韻史と朝鮮語史の貴重な資料ともなっている。

今回の会議は主な企画者が元代の白話碑文を中国語のみならず蒙古語とも比較しつつ系統的に研究している祖生利氏であると見られ、テーマの中心は元代中国語を反映する旧本老乞大であると誰しも受け取った如くである。かく申す私も主としてその興味から特に参加申し込みをし、そして研究発表を行った。以下ではその概略を報告する。

2. プログラムと主だった傾向

下に掲げるスケジュールは当日配られた日程表に基づいて記したものだが、時間はかなり大幅の変動があり、また題目も当日配布されたハンドアウトやパ

1) いわゆる『翻訳老乞大』の漢文部分は諺解本もほぼそのまま踏襲しており、また崔世珍が拠った漢文本文は15世紀末の「新本」であり、ほとんど修正を加えずに底本としているものと見られる。

“『老乞大』・『朴通事』の言語”国際シンポジウム参加報告

ワーポイントではやや異なる人もいた。

6月12日

8:00-8:15 曹広順(中国社会科学院語言研究所), 開幕の辞

午前 第一セッション

8:35-8:55 Alain Peyraube (フランス社会科学高等研究院東アジア言語研究所)・

林微, 「老乞大の量詞」

8:55-9:15 曹広順, 「『老乞大』の「上」と「行」の使用からの話題提起」

9:15-9:35 汪維輝(浙江大学), 「『老乞大諺解』『朴通事諺解』と『訓世評話』

の語彙差異—あわせて『老諺』『朴諺』の言語的性質を論ずる」

9:35-10:05 討論

第二セッション

10:25-10:45 遠藤光暁(青山学院大学), 「『老朴集覧』に見える『旧本朴通事』

とその基礎方言」

10:45-11:05 王雲路(浙江大学), 「『老乞大』および『集覧』語彙雑記」

11:05-11:25 討論

午後 第一セッション

2:00-2:20 竹越孝(神戸市外国語大学), 「新発見の朝鮮時代漢語教科書『象院

題語』の言語的性質」

2:20-2:40 沈力(同志社大学), 「『時』の文法化の潮の満ち干きモデル—『老乞

大』資料を中心として」

2:40-3:00 方一新(浙江大学), 「『元言語辞典』補足—『原本老乞大』を例とし

て」

3:00-3:30 討論

第二セッション

3:50-4:10 船田善之(九州大学), 「古本『老乞大』と蒙文直訳体」

4:10-4:30 趙長才(中国社会科学院語言研究所), 「古本『老乞大』の疑問文」

4:30-4:50 陳輝(浙江大学), 「『老乞大諺解』と『無罪獲勝』の比較研究」

4:50-5:20 討論

6月13日

午前 第一セッション

8:00-8:20 楊永龍 (中国社会科学院語言研究所), 「古本『老乞大』の「去 VP」と「VP 去」

8:20-8:40 遇笑容 (カリフォルニア大学サンタバーバラ校), 「対比分析から見た古本『老乞大』の言語」

8:40-9:00 張頴 (北京語言大学), 「三種類の元代語料における処置式」

9:00-9:20 夏鳳梅 (江漢大学), 「落解粥」考源

9:20-9:50 討論

第二セッション

10:20-10:40 祖生利 (中国社会科学院語言研究所), 「古本『老乞大』の言語的性質」

10:40-11:00 討論

11:00-11:15 方一新, 結びの言葉

討論は実際には一つの発表ごとに行われ、初日の午前中は時間制限があることを皆が意識していたので、おおむね30分に収まったが、今回は司会を別に立てず、発表者が仕切るという方式であったこともあって、後に行くほど時間が大幅に超過し、かつそれをコントロールする人がいなかった、という問題が存在した。

主催者の曹広順氏の冒頭の挨拶によると、国際中国語学会など分科会が多く並行して行われる大規模な研究集会を多く経験してみると、テーマを絞り込んで少人数で集まることの重要性を認識するに至り、人数を20名ほどに限定し、ホテルに全員缶詰になって集中的に行う会合を企画したということであった。司会を立てないのも一つの試みで、自由な討論を重視するという利点はあった。

曹氏はまた、『老朴』だけがテーマの国際会議を開く日が来ようとは昔は思ってもみなかった、とも言っていて、私も全く同感であった。思えば中国の研究者としては文革前の朱德熙・胡明揚といった先駆者を除くと、1983年に北京大

学で半年行われたコーネル大学の梅祖麟教授の講義において『老朴』の重要性を強調されて研究に着手したのがほとんど第一世代であり、更に多くは今世紀になってから旧本老乞大の発見後に参入した者である。また今回は韓国の研究者も誘ったが参加がなかった旨述べられた。実際には浙江大学に留学中の院生の金相圭君の顔があったのだが、韓国では中国語学者はあまり『老朴』を研究しておらず、韓国語学者は非常に多く研究をなしてはいるものの、それは書誌学的な面と朝鮮語部分が主であるため、問題意識が重なりにくかったものと思われる。また京都大学の金文京教授と清華大学の張美蘭教授は出席はしなかったが、それぞれ「漢見言語考」と『『朴通事新釈』中南方語言成分初探』を提出し、会場で配布された。

発表者のうち、ペイローブ教授はかつてフランス社会科学高等研究院東アジア言語研究所の所長をしておられ、私が1992年にフランスで在外研究した際には受け入れ先になっていただき、それ以来の再会であった。現在ではフランス国立科学研究院 (CNRS) の副院長という要職に就いておられ、今回も折から開催中の上海万博のヨーロッパ館での学術行事の使節の一員として訪中された由であった。パワーポイントによるプレゼンテーションであったが、内容的には竹越孝氏が同一テーマで書いておられる論文を見ずに研究したものようであった。他の発表もフルペーパーは用意せず、パワーポイントないしワードを見せて話をするというスタイルが多かった。

今回特に注目されたのは、竹越孝氏による『老乞大四種』という同一内容ごとに四行ずつ比較して配列した電子テキストを使用している研究者が多いことで、開発者の竹越氏自身も驚いておられた。かく申す日本勢も2004年から東京外国語大学朝鮮語科で伊藤英人氏・竹越孝氏・私のほか数名の中堅若手の研究者および院生で小さな読書会を続けていたが、そこでも『老朴集覧』で注釈されている語を一つ一つ『老乞大四種』に基づいて全用例の検討を行い、数多くの研究が生まれる源泉となっていた。竹越氏がオープンソースの考えに沿って求めがあれば研究者にどんどん提供していたのが、国際的にも流通して高く評価されることにつながったことになる。

全般的に言うと、このシンポジウムに参加することがきっかけで『老乞大』の研究を行ってみたという発表者が多かったが、従前から元代の他の資料をじっくりと手がけていた祖生利氏や張頴氏などの発表がやはり傾聴に値するようには思われた。その中で、2005年に『朝鮮時代漢語教科書叢刊』全四冊（北京、中華書局）を刊行して、中国本土ではじめて系統的に『老乞大』などの朝鮮資料の基礎資料を提供した汪維輝教授の研究発表はさすがに安定したものであった。

シンポジウムの最後の結びの言葉で、方一新教授は今回の会議の特徴を概括して「小型・集中・自助」の6文字にまとめられた。20名あまりの参加者全員が同じホテルに泊まりこんで、二日間とも朝8時から発表・討議に専念したことは確かに目覚ましいことであった。また、テーマもよく絞り込まれており、『老乞大』『朴通事』の諸版本の中でも特に元代に焦点が当てられていた。

中国の学会では発表・討論のほかにエクスカージョンもたいてい組み込まれており、今回も二日目の午後は全員で富春江の舟遊びに行った。これも実は学術的に極めて意義深いことであり、そうした場で人間関係を広げることがその先の研究活動の展開に大きく利いてくることになる。私も商務印書館の若い編集者である何瑛さんとその機会に知り合いになることができた。商務印書館というのは中国一・二の学術出版をしている出版社で、中国では一流出版社の編集者は大学教授・准教授・助教と並び立つ地位を与えられており、博士号保持者が何十人となきいる。何瑛さんも近代漢語の分野で博士号を取得して、この分野の編集に従事している。中国ではどんどん大規模の純粋学術的出版が推進されているが、このような態勢がその重要な背景としてある。

3. 最近の研究動向と将来の展望

さて、『老乞大』『朴通事』に代表される朝鮮資料による中国語史研究は近年ますます興隆を見ており、数ヶ月に一回の勢いで有益な国際的な研究集会が開かれるようになった。私どももその一翼を担っており、2005年3月に嚴翼相教授らとともに第一回韓日中国語学国際会議をソウルの漢陽大学にて開催し、第二回は2007年6月に青山学院大学相模原キャンパス、第三回は2009年9月に

中国山東省威海の山東大学威海分校でそれぞれ行なってきた。その正規の論文集も私と敝教授との編で韓国・学古房から2005年、2008年、2010年に刊行した。第4回は2011年4月に台湾高雄中山大学で開催する予定にしている。

上で記した2004年から東京外国語大学朝鮮語科で行っていた『老朴集覧』読書会は10名くらいの参加者で四季折々に1回ずつくらい行う細々としたものであったが、中国語史と朝鮮語史の専門家が共同で行う研究会としてユニークなものであった。韓国の鄭丞憲先生が在外研究で東京におられたときにも参加していただき、2008年7月にはより系統的な司訳院四学の総合的研究に関する会合を青山学院大学で開催した。それが機縁となって、翌年には韓国で「訳学書学会」が正式に成立し、2009年9月に全州の又石大学で第一回大会が開かれ、2010年8月にはソウルの高麗大学で第二回大会が開かれ、学会誌『訳学と訳学書』創刊号も刊行された。また第一回大会にあわせて日韓の研究者で協力して『訳学書文献目録』も編んで、2009年9月に刊行した（ソウル、博文社）。

訳学書学会第一回大会では鮮文大学校中韓翻訳文献研究所所長の朴在淵先生と知り合う機会があり、瞬く間に大いに意気投合して翌年に「清代民国時期漢語国際シンポジウム」を同校で開催することとし、2010年5月に4日間の会期に渡る会議を行った。その論文集と文献目録も韓国で正式に刊行すべく準備が進行中である。

話は前後するが、前記の汪維輝教授も2008年12月に来日し、『老朴集覧』読書会に参加された。そのときは研究会も含めて三日間に渡り接待し、東京大学文学部小倉文庫にも案内して未公開の朝鮮資料を紹介した。それが機縁となって、汪教授、私、朴在淵教授、竹越孝氏とで『朝鮮時代漢語教科書叢刊』の続編を刊行することとなり、数ヶ月後には中国で刊行される運びとなっている。

研究集会の開催と学術書の刊行を日中韓台の東アジア地域の研究者で心置きなく日進月歩の勢いで展開できる時代となっていることは誠に幸せなことである。



同国際会議準備委員会から提供された写真，前列左から方一新・沈力・汪維輝・王雲路・Alain Peyraube・曹広順・遇笑容・遠藤光暁・竹越孝・船田善之，後列左から5人目祖生利

附記 本報告は青山学院大学経済研究所 2010 年度研究助成による研究成果の一部である。